

新春挨拶

中村祥二（会長）



会員各位

2015 年元旦

明けましてお目出度うございます。お元気に初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。ご専門やご趣味の香り分野で御活躍をされ、充実した時をお過ごしのことと存じます。本年も、皆様のますますの御発展をお祈りいたします。

昨年は広島県の土砂崩れ、御嶽山の噴火、長野県の地震などの自然災害がありました。本年が平穏な年でありますよう、そして皆様が御健勝でありますようお祈り致します。

1 国際香りと文化の会からのお願い

一昨年の理事会で国際香りと文化の会は休止することに致しました。その折、機会を見て何らかの形で活動を続けたいという強い希望が有りました。これを受けて昨春から従来のホームページに香りに関するエッセイを載せています。季節に一度、春号から始めて現在、冬号まで4回掲載をいたしました。ご覧いただいておりますでしょうか。

これから理事会の方々にも執筆いただけることになりました。そして会員の皆様にも是非ご執筆をお願いしたいと思っております。何とぞ宜しくお願い致します。

香りに関することでしたら内容は自由ですが、参考までに以下にテーマを挙げてみました。その他の詳細はホームページを御覧ください。

VENUS ホームページ版の投稿内容
会の趣旨に即した内容

花、植物、ハーブ、スパイス 果物 生理心理効果、香料、香水、香道、薫物、嗅覚、香りの文化、香りの歴史、香りと文学、アルコール飲料、香りの言葉など

2 五感のつながりについて思う。ホームページのエッセイを考えていて感じること。

「色は匂う」「香りを聞く」「味をみる」「音色を読む」といわれてきたように、人間の五感はいかに補い合いながら、深いところでつながっている。私は日常の場で香りが他の感覚を鋭敏にさせたり、快さを強めたり或いはかき乱したりするのをしばしば経験する。逆に他の感覚が香りの感じ方に強く影響することもある。また、時として複数の感覚が分離しにくいことが起こる。そしてこれらが微妙に影響し合っている。

多くの識者が述べているこの感覚について私の経験も含めいくつかを挙げてみたい。

○「言葉は確かに対象を的確にとらえ論理思考を育てましたが、逆にその分析的な働きによって、人間の五感などは一つ一つの感覚系へと分断されてしまう。手の五本の指のようにきれいに五つに分離されているかのように思いがちだ。だが、もともとは五感ではなく一感であった。一感とは、一体の人間丸ごとの存在なんです。本来は外界の存在をこの一感として感じとらなければならないものです」グラフィックデザイナーでアジアの図像研究、知覚論を展開されている杉浦康平さんとの対談の折にお話を伺った。

○ **あきによし奈良の京は咲く花の
にほふがごとく今さかりなり**

太宰少弐小野老朝臣『万葉集』巻3-328)

「奈良の都は花が美しく咲き誇っているように今繁栄を極めている」天平文化の華やかな都を賛美した歌である。最近、嗅覚的な「にほふ」を含めた解釈が行われているのを見かけたことがある。

○「まだ粉雪の舞う頃だった。小倉山で桜の枝を頂いて帰り、炊き出して染めてみたら匂うように美しい桜色が染まった。染場中なにか心までほんのりするような桜の匂いが満ちていた。私はそのとき、色が匂うということを実感として味わった。人間の五感というものはどこかでつながっていて、美しい要素には、五感の中のいずれかと微妙に響き合っているものがあるように思われる」

志村ふくみ『色と糸と織と』岩波書店 岩波グラフィックス 35

心に強く残るお話である。

○ **うの花の匂う垣根に
時鳥はやもきなきて
忍音もらす夏は来ぬ**

佐々木信綱作詞「夏は来ぬ」

この詩の解釈には迷うことがあった。うの花（ヒメウツギ）の白さは目を惹く。ほのぼのとした香りが漂ってくるような気持ちになる。1カ所の花で判断するのは危険なので神代植物公園とフラワーセンター大船植物園とでうの花を注意深く嗅ぐことにした。しかし、快い香りがするのではないかという期待は外れ、どちらでも珍しいほど香りを感じない。「白い花が色美しく映えて咲いている垣根に」が正しい解釈なのだ。そういえば白い花の中でもうの花の白さは際だって美しい。花言葉は「秘密」。

○「匂」は匂→匂→韻→韻と遡れる。「韻」は音の気持ちの良い響きの意で、例えば「韻を踏んだ詩歌」のように用いられる。「韻」は「韻」と同じ意味である。「匂」は「韻」の省画からきている。「匂」は「匂」からきた国字である。中国の漢字、甲骨文の研究で名高い白川静先生は、今の国字の「匂」は間違っただけの誤字であり、森鷗外や幸田露伴が用いた「匂」の方が正しいと指摘している。漢字の歴史の流れの中で嗅覚と聴覚と色彩感覚がつながった感覚表現であるのは興味深い。